

# 精神安定剤

副代表 谷川 勝男

という薬のことではない。

出会った人たちが、出会った物たち。が、気分を変えてくれて、

新たな気分の一  
日、二カ月、一年にしてくるなら、壮快な気分のままに快食・快眠の日々が約束される。満足が得られる。自己満足ほど、次へのエネルギーとなるものもない。  
次——があれば、気持ちのうさも晴らされる。

◆ ◆ ◆  
二月二十六日(月)に上京して、  
三月四日(日)に北見に戻った。  
そして五日(月)、支援する会の総会と講演会。福島恵美子さんの「認知症」についてのお話は、きわめて知的で論理的、一切の無駄が排

された展開は耳を傾けているだけで気持ちが洗われるようにさえ思われた。

命の(最期)や(看取り)がどんなことになるかの予想はつけられない。

◆ ◆ ◆  
上京したときの定宿は大井町駅前のアワーズイン阪急。チエックイン済ませると、わが家に足を踏み入れたような安堵でほっとさせられる。

◆ ◆ ◆  
それから歌舞伎町を歩き、神保町を歩き、秋葉原を歩く。そして文庫本を二

千円で二十冊、池波正太郎と田辺聖子の本が帰りの荷を重くした。

しかしその(重さ)は気持ちの(うさ)を吹き払ってくれる風でもあるから。

◆ ◆ ◆  
池波正太郎がまた天才、信長や秀吉や家康や真田幸村を解して小説を組み立ててゆく、その達意の文章は繰り返し読んで飽きない。

◆ ◆ ◆  
娘楓子の結婚式は三月三日(土)のこ

とだった。

新横浜の式場での四時間は、厳粛とサプライズのあい間に(笑い)をはさんで楽しませてくれた。

◆ ◆ ◆  
家族の幸せな様子がまた気持ちの張りを新たにしてくれてうさを晴らしてくれ

◆ ◆ ◆  
四十年前の卒業生ゆかりさんにお会いしたのは、三月一日(木)のことだった。新宿駅東口で待ち合わせて、喫茶ルノアールでおしゃべり。そのあと伊勢丹七階のレストラン街で食事をして、別れる。

り。

百数十人が出席の結婚式の四時間が、あつという間であつたのは、わが娘の結婚式であつたから。

◆ ◆ ◆  
ゆかりさんが結婚された頃、夫である人は東大医学部に所属されていて救命救急の現場で寝る間もなしの手術に明け暮れていた。

◆ ◆ ◆  
結婚を期に(研究)の場に戻りたいと、准教授になられていたのだが、一年前、私大関連の新病院に教授として移られて今日に至っている、というのが今回知らされたことだった。

りさんへの(質問責め)からおしゃべりは始まった。

◆ ◆ ◆  
その二つであるらしいのだが、仕事の場が二つや三つや四つではなくて自宅に戻れないことも少なくなくて、正に「二十四時間・三百六十五日」なのであった。

◆ ◆ ◆  
われわれ市民(患者)はより良い医療を求めて止まない。そうであればあるほど、自らの心身の(安定)に心して生活し、医師をはじめとする病院スタッフの方々の負担がより軽く、を願わないでほしい。



研修の思い出づく

りのお手伝いと私達の感謝の心を伝えたく、臨床研修医の皆さんを招き「北見での思い出づくりの集い」を平成27年から野付牛公園で毎年開催しています。

◆ ◆ ◆  
その時、炭焼きコンロを囲んで北見式焼き肉とオホーツクビールで楽しく交歓した幾人かを含む臨床研修医7名が吉田院長から修了証書を授与された。

◆ ◆ ◆  
今回修了した一人は北見赤十字病院での勤務が決まっている。北見市民として、誠に嬉しい授与式であった。(逢坂記)